

高山の文化を高めた人々

35

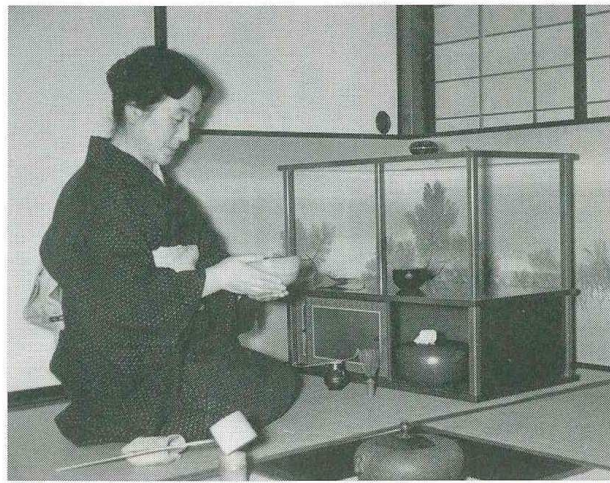
茶道表千家を広めた 川上多賀(宗隆)

平野 邦子

上二之町 旧高山市図書館
前に「町年寄 川上氏宅跡」

と記した石柱があります。その川上魚問屋哲太郎氏の二女として、明治三十三年に生まれ、祖母は表千家十代吸江斎の娘でした。

子供の頃はおてんばで、雪



昭和35年頃の川上先生

のえび坂を下駄で横すべりなどもして遊ばれたとか。高山高等女学校第二回卒業生でした。

古川へ嫁がれたのですが、ご縁なく、父親の従兄弟である京都久田家の無適斎宗匠の内弟子に入られ、本格的に茶道を学ばれました。

昭和四年に高山へ帰り、森下町「寸松庵」にて表千家のお茶の指導を始められました。翌五年に嫩草会を創立し、立派な会則が残っています。

昭和十五年の十周年には、高山の名士やお弟子さん五十名ほどが集まり、日枝神社で盛大な茶会が催された写真があります。

十一年に高山高等女学校の茶道講師となり、二十四年に高山高等学校に変わってから

昭和五十年頃迄四十年間、大ぜいの生徒さんに指導されました。親子二代、三代と教えられたことになりました。

稽古は必ず一と五の日と決まり、初釜も一月五日に昭和二、三十年代は天照寺で、四、五十年代は本教寺で行われました。



昭和62年 米寿のお祝い

その頃には、弟子や働く女性も多くなり、初釜も昼夜二回に分けて開かれていました。

昭和三十年には、即中斎、久田宗匠共に来高されて二十五周年献茶式、三十五年には、嫩草会三十周年と川上先生の還暦、四十五年に同会四十周年と先生の古稀、五十一年には、同会四十五周年と先生の喜寿、五十二年には、同門会が発足し、五十四年に嫩草会五十周年と先生の傘寿、その

つど久田宗匠がご家族連れで来られ、昭和六十二年の同門会十周年と先生の米寿には、現在の家元(而妙斎)と久田宗匠が来高されました。

先生は、女性で高山初めての謡曲も習得されていて、初釜には謡を披露されたり、お得意の百人一首をされたりしました。お酒は全然だめでしたが、においだけで酔うといつて白いきれいな頬をピンクに染め、高い張りのある声でよくおしゃべりして、華やかな方でした。

兄斎一郎氏の斐中の同級生で名畑応順先生(大谷大学名

誉教授・現郡上市明宝)が私の寺(本教寺)へお説教にみえるとお必ず聞きに来られ、「川上問屋さんには大変お世話になった」と色々な昔話をされ、楽しい時間を過ごされていました。

長い激動の昭和という時代茶道表千家の中央お家元と深いつながりを持ちながら、高山に広く茶道を一般化して下さった大事な方だったと思います。

今年五月、千人以上の方が集まる全国大会が当地であります。川上家の跡継ぎ省吾さんの生家である二木家も、一席担当されます。家元が会誌に、年のはじめにと題して「本年も茶道と古くより縁のある高山が選ばれています、幕末より明治にかけて、千家から高山へ嫁入った吸江斎の

一女・信という方のあとに当流の茶が引継がれています。高山では江戸時代を通じ宗和流が行われ、幕末より当流の茶も加わり、旧観を保った家並みの高山に静かな雰囲気

をたたえているのがみられます」と書いておられます。このことを川上先生は本当に喜んでいらつしやることでしょう。

平成三年八月六日逝去、今年は十七回忌にあたります。